

測ること・活かすこと

- 第 1 回 -

藤原 靖也
(ふじわらのぶや)

国語力はきちんと測定できているか？

はじめまして。和歌山大学の経済学部で管理会計を教えている藤原靖也（ふじわらのぶや）と申します。管理会計とは、会社や組織をどのように上手に動かせばよいのかを「しくみ」から考える学問です。これから、どうぞよろしくお願いいたします。

いきなりですが、多くの高校生が国語の授業で「文学」を学ばなくなる可能性があることをご存知でしょうか。これは国の学習指導要領が変わるためです。夏目漱石・芥川龍之介・太宰治といった文学の巨匠から、源氏物語といった古典まで、皆さんが国語の授業で一度は触れてきたこ

とに触れないまま社会に出ていく可能性が高い、といえます。代わりに、企画書・契約書やメールの書き方・グラフなどの資料の読み方を教えるのだそうです。そして、この決定に至った1つの根拠として使われたのが、OECDが2015年に行った「PISA」という共通テストの結果でした。

PISAの文章読解の問題では、例えば会社の社長・部長のやり取りを読んで問いに答えさせるなど非常に実用的な問題が出題されます。その結果は以下のように表現されています。「視覚的な情報と言葉との結びつきが希薄になり；知覚した情報の意味を吟味して読み解くことなどが、（重要な課題として）PISAの結果分析からも具体的に浮かび上がってきた。」つまり、もっと国語でグラフの読み方などの実用的な教育を行うべきだということです。

さて、この例を出したのは、皆さんにぜひ考えてほしいことがあるからです。「先のPISAというテストの結果は、日本の国語教育のあり方や日本人の国語力をきちんと測定しているものだと思いますか？」きくと答えは十人十色になるでしょう。もちろんこの結果も受けて改訂された国語の学習指導要領がどのような結果を生むかは分かりません。一方、

少なくとも成績が高かった国のなかで、日本という高校の「国語」の間を使ってまで実用的な文章の読み書きの練習をしている国を私は聞いたことがありません。

ノーベル経済学賞を受賞したノイマン教授はこう記しています。「測定が社会を殺す場合もある」と…。国語の例1つを取っても、測ること、それを活かすことの難しさが浮かび上がっているのです。

とくに現代の情報システムの進展は目まぐるしく、テストの結果や傾向などのデータ自体はすぐにはじき出せます。しかし、それをどんな目的でどう使うのか。何が重要なデータで、どう解釈するのか。測られたデータに意味を付けていくのは他でもない「ヒト」にしかできないのです。

みなさんも「測ること」について、一歩踏み込んで考えてみませんか。

※ちなみに、私からは上の問いかけに関して、少なくともPISAテストは実生活への応用力を測定するためのものであって、決して国語力自体を測定するという目的は持っていない、ということだけは付言しておきましょう。

(和歌山大学経済学部 准教授 博士(経営学))

第117回 わだい浪切サロン

和歌山大学・岸和田市地域連携事業

高齢期の地域生活を考える

～ドイツ「多世代の家」から～

話題提供者 村田 順子 氏 和歌山大学 教育学部教授

▶日時 11月20日(水) 19:00～20:30

▶場所 岸和田市立浪切ホール 1階 多目的ホール

！ わだい浪切サロンとは？

毎月第3水曜日（2月と8月を除く）の午後7時～岸和田市立浪切ホールで開催するmini和歌山大学です。

申込み
不要

参加費
無料

お問合せ先 ▶▶ 和歌山大学岸和田サテライト

〒596-0014 岸和田市港緑町1-1 岸和田市立浪切ホール2階
電話/FAX: 072-433-0875